

---

# 魔法使い来る！

kaji

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法使い来る！

### 【Nコード】

N1032M

### 【作者名】

k a j j i

### 【あらすじ】

ある日、寝ているとエルボーを食らった。

慌てて起きるとサングラスをかけた魔法使いが立っていた……。

自分の好きな展開。ある日　　がやってきて何だかどたばたコメデイものがやってみたくて

チャレンジすることになりました。まだものになるかは分からないのでとりあえずタイトルのみ

作ってみました。

最近まじめな話を中心になっていたので飛び抜けたコメディーを作  
ってみたいなと思っていますので  
一応それを目指します。

プロローグ「帰る家があるっていいものですね」

俺は普通にどこにでもいる大学二年生の井上久いのうえひさし。今日も適当に大学の講義に出て帰ってきた。家の近くまで来ると誰かが外に立っているのが見えた。近づいてみると親父とおふくろだった。親父はサングラ履きでたばこを吸っていた。おふくろはおにぎりを食べていた。いったい外で何をやっているのだろうか。

「親父達。外で何してんの？」

「ああ。久か。いあなあ。ちよつとなあ……」

「ちよつと何だよ」

「まああれをしてみるよ」

親父の指の方向を見たが何も無い。あるはずのものが無い。今日出る前にあったはずの俺の家が無いのだ。塀は残っているので確かに俺の家ははずだ。なぜ無いんだろうか。

「家が焼け落ちて灰になったんだよ」

「はあ！？ 何言ってるんだよ？」

「まあ。いいか。保険で直そう。母さんだから良かっただろう。保険入っておいて」

「ばつちりね。金目のものもすっかり持ち出して来たわ」

おふくろは嬉しそうに貯金通帳を掲げた。確かにグッジョブだが何かが違う気がするぞ。

「それより説明してくれよ。何があったんだよ」

「いや。何ってお前の部屋が爆発したかと思ったら一気に燃え広がってこんな状態さ。参ったね。こりゃあ。こんなこともあるんだな

あ

親父とおふくろは前から天然だと思っただがここまでだとは思わなかった。何がこんなこともあるんだなあだ。家が灰になったのにこの落ち着きぶりは異常すぎる。とにかく親父達は話にならない考えろ。何か最近おかしなことがあったはずだ。昨日か。いや。昨日は何も無い。じゃあ今朝か。今朝。今朝。

「あ。思い出しだぞ」

俺は一つ思い出したことがあった。

「あいつの仕業か！」

「おい！ 久！ どこに行く」

俺はあいつを探すために家のあった所に駆け出した。こんなことをやるのはあいつ以外には考えられない。絶対に探し出して吐き出させてやる。

## ブログ「帰る家があるっていいものですね」(後書き)

ご拝読ありがとうございます。

コメディーっぽいものを書いて見たくてまだ少しですが投稿してみました。設定は凝らないで軽く書こうと思いますのでよろしくお願ひします。

## エピソード「魔法使いは144分の1」

話は今朝に遡る。俺は昨日の飲み会の酒が効いて、いい感じに一番深い眠りの中にいた。いわゆるノンレム睡眠だ。俺は存分にノンレム睡眠を堪能していた。そこにいきなり俺の腹の上に何か落ちてきたのだ。

「げふうふう」

俺は慌てて飛び起きると俺の腹に深々とエルボーを食らわせている奇妙な人間がいた。黒い三角形のトンガリ帽子にローブ。まるで典型的な魔法使いのような人間がいたのだ。

「痛ってえし！ どけ！」

「きゃあ」

俺はこの魔法使いっぽいやつを押しつけた。魔法使いっぽいやつはベットから転げ落ちると回転しながら壁に激突した。

「痛いじゃないか。何をする」

「……」

魔法使いっぽいやつは初めてしゃべった。いきなり喋るなんて止めて欲しい。びっくりするじゃないか。

「おい。何か喋らないか。私だけ喋って馬鹿みたいじゃないか」

「それよりもお前は誰なんだ。どこから入ってきた？」

「どこからってそれを私に聞くのか？」

「じゃあ誰に聞くんだった！ 隣の犬にでも聞けっつてか」

「ははは。お前つまらないな。5点」

「うるせえな。だいたいだな……ありゃ。何か踏んだぞ」

俺は力説しようとしてベットから降りると何か硬いものを踏んだ。見ると長い杖のようなものが真っ二つに折れていた。

「ああ。それは私の杖じゃないか。どうしてくれるんだ。これでは私は元の世界に帰れない」

「それよりお前だれだよ」

「どうしよう。どうしよう」

その魔法使いっばいやつは折れた杖を持ってくっつけようとしていた。悪いがもう無理だろ。それ。瞬間接着剤でも無理だと思っぞ。

「おい。そこのお前。何か代わりになるもの無いか？」

「何だ。それは」

「杖のようなものがあればいいのだができれば木製のもので何かちよつど良いものは無いか」

「普通の一般家庭に杖なんてある訳ないだろうが」

「まあ何でもいいんだ。ちよつと失礼する」

魔法使いっばいやつは俺の部屋をさがさそと探り始めた。どんなに探しても杖何てある訳ない。それにしてもこいつよく見ると真っ黒いサングラスをしていた。何でサングラスなんてしているのだろうか。それとたぶんこいつは女だ。口調は男っばいが体つきが女にしか見えない。年は顔があんまり見えないのでよく分からないがかなり若そうに見えた。

「何だこれは？」



「止める。それは触るな。ここには無い。俺が探してくるから待ってる」

危うく俺の秘蔵のぶつが公開されるところだった。危ない所だった。とりあえず何か適当なものが無いか探しに一階まで行った。

一階を探したがやはり杖何て無かった。当たり前だ。あるのは台所にある木のしゃもじだけだった。

「うーん。しゃもじしかないな」

「それで構いません。貸してください」

「あ。おい。いいのかよ」

「構いません。ただ私の力が144分の1になるだけですから」

「何かプラモみたいな数字だな」

「ていうかそれよりお前誰だよ」

「申し遅れた。私は魔法使いだ」

「魔法使い？」

「ああ。そうだ」

「そうか。なるほどな」

これはどうしたことか。自称魔法使いはしゃもじの使い具合を試しているのか色々と振ったりすくったりしている。たぶん俺の予想だときつとどこかの病院から抜け出してきたのかも知れない。とにかく危ないヤツだ。適当に話を合わせて追いつ返そう。

「それだけ？」

「それだけだ」

「名前は？」

「魔法使いだ」

「そうじゃなくて名前くらいあるだろ」

「それが思い出せんのだ。私が魔法使いで異世界から飛ばされてき

たということはあるに違いない」  
「たぶんこっちの世界に飛ばされた後遺症じゃないのか。きつとよくあることに違いない」

「おお。よく分かるな。たぶんそうなのだ。困ったな」

そう言いながら頭を抱える自称魔法使い。なるほど。そういうパターンか。それなら俺にも考えがある。

「魔法使いなら何かやってみせてくれ」

「何かって何だ」

「えーとだな。そうだ。炎だ。炎くらい出せるだろ。魔法使い何だし」

「任せる。ちょっと離れているよ。危険だから」

「あ。ああ」

自称魔法使いは両手を広げて離れるように促した。そして、しゃもじを握りしめて精神を集中させて何事か呟いていた。

「炎を私の前に現したまえ。ふぁいあー!!」

「おおあああああ。あ？」

自称魔法使いのしゃもじにライターの火くらいの炎が灯った。これが144分の1の力なのか。何も無いところから炎を出すのはすごいが何かすごくないぞ。

「……」

「……」

「どござ」

「ああ。すまない。ふー」

せつかくなのでたばこに火をつけてもらった。やはり魔法使いに点けてもらったばこはうまい。

「やはり。力が落ちてきているな。何てしょぼい炎だ。情けない。いつもならこんな家吹き飛ばしているところなのに」

「お前とんでもないやつだな。危なかったわ」

それにしてもこいつどんなマジックを使ったんだ。ライター程の火だがどこからか炎を出した。俺もマジックをやるがそんなマジックどこのデパートで売っていたんだ。俺も買いたいぞ。

「おい。お前どこから来たんだ」

「異世界から飛ばされてきた」

「嘘付け。どこかのマジシャンか何かだろ。大方夜のステージが終わって酔っ払ってマジックで俺の部屋まで来たんだろ」

「そんな訳あるはずない。非現実的すぎる。これだから最近の子供は困る」

「お前が言つな。それよりもその目障りなサングラスを取れ」

「な。何をする。それは私の唯一のチャームポイントなんだぞ」

「うるさい。取れ！」

何だか無性にいらついたのでマジシャンのサングラスを取ってやることにした。しかし、このマジシャン余程サングラスが取られたくないようで全然サングラスに触れない。

「いいから取れよ」

「駄目！」

「なんだ。騒々しいな」

親父たちが台所まで降りてきた。まずい。いや。チャンスだ。親父

に言っつてこいつを追い出してもらおう。

「親父！ 見てくれ！ 家に変なやつが紛れ込んでいるんだ」

「あ。ああ。そうだな。母さん。コーヒー頼むよ。うんと薄いやつ」

「親父！ 聞いているのか。しかもこいつ魔法使い何て言っつてるんだぞ。おかしいだろ」

「いいんじゃないか。魔法使いの一人や二人。なあ。かあさん」

「ええ。久も拾……ごほごほ。別にいいじゃない。何だっつたら何日か泊まっつていけば。お友達でしょ」

「はい。十年來の友達です」

「お前も適当なことを言っつな！」

親父は何事も無いように台所のテーブルに座っつて新聞を読み、おふくろはコーヒーの準備をしていた。親父達は何でこんなに落ち着いているんだ。変なやつが家に入り込んでいるんだぞ。

「なんでそんな話になっつているんだ」

「親父殿。母上殿。お世話になります」

「ああ。自分の家だと思っつて羽を伸ばしたらいい。すぐに朝ごはん。そこに座りなさい」

「ありがとうございます。失礼します」

そう言っつて席に付くマジシャン。何て胆の座っつたやつだ。それともんでもない馬鹿なのかも知れない。

「何で受け入れるんだ。意味分かんねー」

「うるさいわよ。久。今日は久の大好物のカップラーメン塩味なのよ」

「マジかよ。よっしやー。頂きますー」

俺は三度の飯よりもカップラーメンの塩味が大好きなのだ。もうマジシャン何てどうでも良くなった。マジシャンを見るとカップラーメンを怪訝そうに見ていた。

「なんだ。これは」

「知らないのか。これが日本の最高の発明品カップラーメンだ。まあ食べてみる」

「あ。ああ。……。う。うまいなこれは」

「そうだろう。日本の朝の食卓には必ずこれが並ぶんだ。覚えておけ」

「ああ。覚えておく」

「そういえば久。そういえばこの人は何ていう名前なんだ」

「え。こいつ？ こいつは……」

名前が思い出せないとか言っていたな。俺は周りを見渡して適当に名前をつけてやることにした。丁度親父の蔵書が目についたのでそれを組み合わせさせてやった。

「東野みゆきだよ」

「東野みゆきさんか。賢そうな名前だな。将来は作家にでもなるんじゃないか。なあ。母さん」

「ええ。そうね。そして、ゆくゆくはドラマ化、アニメ化でもしそうな名前ね」

「ああ。そうだな。出せばベストセラーだろ」

やっといつもの井上家の食卓が戻ってきた。やはり朝はこうでなくてはいけない。カップラーメンにコーヒー。俺は何て幸せものなんだ。

「久。大学はどうだ」

「別に。普通だよ」

「そうか。普通か」

「普通だよ」

「普通が一番よね」

「ああ。そうだ。普通が一番だ」

今日も何事も無く普通に朝食が終わった。

朝食が終わると大学に行くために準備をした。今日も一限だけ出ればいい。楽なもんだ。帰ったら久しぶりにプラモでも作るう。何でかそんな気分だった。

「じゃあ。行ってくるよ」

「ああ。しっかり勉強するんだぞ」

「ああ。分かってるよ。行ってきます」

「じゃあ東野さん。しばらく二階の空室を使ってくれ」

「ありがとうございます。お世話になります」

何か大事なことを忘れていている気がしたがまあいいか。俺はいい気分です。大学へと向かった。

そして現在……。

俺の家は見事に灰になっていた。俺は只今東野みゆき（仮）を探しだすために家があった敷地に入り込んだ。

庭に入ると東野みゆき（仮）が木のしゃもじを見つめてぼーと立っていた。帽子とローブはぼろぼろだったがサングラスは無傷だった。何でサングラスが壊れなかったのだろうか。俺は怒りのあまり東野みゆき（仮）に掴みかかった。

「お前。俺の家を何てことしやがる!」

「久。この世界は何て恐ろしい所なんだ」  
「何だつて！」

またこいつはおかしなことを言い出した。俺は頭が痛くなってきた。

「でも安心してくれ。大事が起こる前に倒したから」

「東野みゆき（仮）。お前何をやった。意味が分からない説明しろ」

「ああ。いきなり箱が光りだして私に攻撃を加えようとしたんだ」

私はそれに対抗してふぁいあーで攻撃したら箱が爆発したんだ」

「箱……。そうか箱か」

たぶんテレビだと思う。こいつテレビに攻撃しやがったんだな。何かアニメか何かをやったのだろう。こいつは見たとおりのアホだから敵だと思って攻撃したんだろう。

「お前にも見せたかった。小さな炎じゃないぞ。部屋一面を炎で覆ってしまうような巨大なやつだ。どうだ。すごいだろう。人間やる気になれば何とかなるものだな」

「ああ。もういい。お前の話など聞きたくない。もう死んでしまいたい」

「おい。久。聞いてくれ。頼むよ」

俺は絶望のあまり思わず膝を抱えて座り込んだ。東野みゆき（仮）は俺をゆさゆさと揺さぶった。それよりも今日どこで寝ればいいのかだろうか。

「おい。駅前のホテルを取ったから今日はそこで寝よう」

「ありがたい。お世話になります」

「おい。久。早くしないと置いてくぞ。よし。みゆきちゃん。途中でラーメンでも食べていこう」

「それは何だ。うまいのか」

「ああ。カップラーメンよりもうまいぞ」

「それは楽しみだな」

楽しそうに去っていく宮部みゆき（仮）と親父達。なぜ誰も疑問に思わないんだ。何かがおかしい。そう思いつつも俺はラーメンに釣られて付いていくしか無かった。

終わり



## エピソード「魔法使いは144分の1」（後書き）

ご拝読ありがとうございます。

整いましたので完結とさせていただきます。久しぶりに自分らしいものが書けた気がしたので満足です。

読んで頂けた方がありましたらありがとうございます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1032m/>

---

魔法使い来る！

2010年10月11日04時21分発行